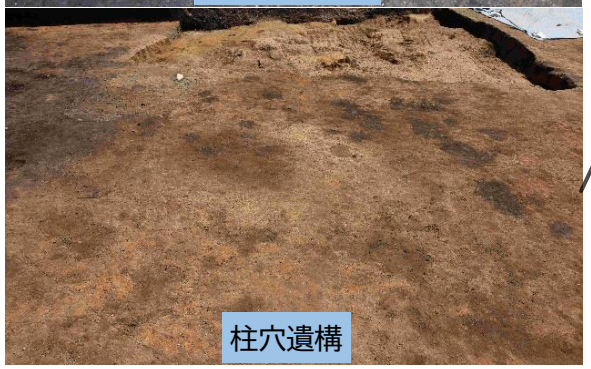
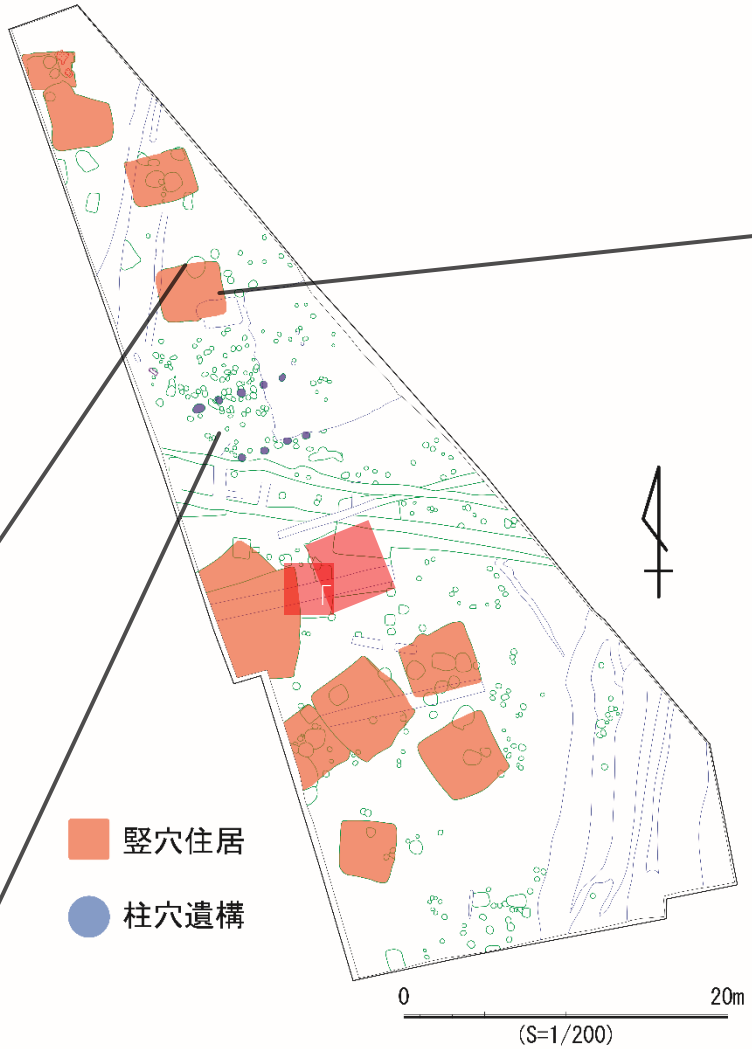
R7 岩地遺跡発掘調査　現地説明会

各務原市埋蔵文化財調査センター

はじめに

岩地遺跡は、那加土山町から岩地町にかけて分布する集落遺跡です。弥生時代から古代、中世に及ぶ遺物が見つかっている遺跡で、今回の発掘調査は、「(都)日野岩地大野線道路」改良事業に伴い、今年度7月から9月にかけて実施しています。





竪穴住居群

地表面を一段深く掘り下げた半地下式に造られる方形状の住居です。本調査では、10～11基の住居が密集して確認され、いずれも規模は1辺3～4mほどの均一な規模です。住居跡からは須恵器(陶質土器)や土師器(素焼きの土器)、灰釉陶器が出土しており、その形状からいずれも8～9世紀のものが多数を占めています。旧岩地川及び境川の周辺に集落が形成されたことが分かります。

市域全体では、那加・蘇原・鵜沼地区を中心に古代集落が広く見つかっており、8世紀頃に古代各務郡の繁栄がありました。

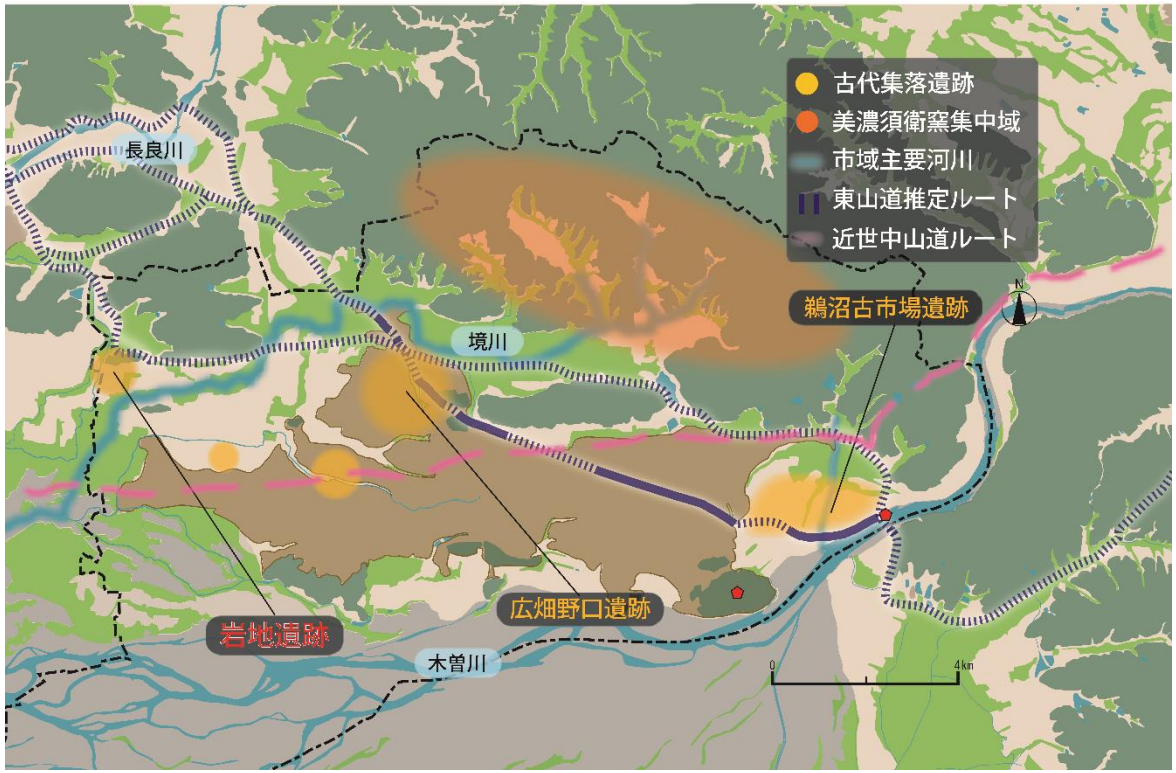
須恵器について

各務原市域では、須恵器が良く見つかります。須恵器とは古墳時代後半から奈良・平安時代まで列島各地で生産された陶質の土器の事を言います。市山間部では美濃須衛窯（工房跡）が多数発見されており、7世紀後半から須恵器生産が始まりました。各務郡で生産された須恵器は、市域の集落だけでなく、奈良の平城京など他の地域へも移出していたようです。須恵器生産は、古代各務郡の主要産業であり、地域発展に大きく貢献したようです。

須恵器出土状況

※本遺跡で出土したものではありません。

多様な須恵器



市域にみる古代集落の再編成

これまでの発掘調査により、奈良～平安時代にかけての集落遺跡は蘇原地区や鵜沼地区を中心に広く確認されています。とくに、8世紀に入ると、各遺跡で竪穴住居跡が増加する傾向にあるようです。つまり、古代各務郡では、8世紀頃に人口の増加があり、地域の発展があったのではないかと想定しています。その背景には、須恵器生産の本格化のほかに、「古代東山道」の整備があったのではないかと考えています。

東山道とは、古代の官道のひとつです。中央（都）と地方を行き来する街道は、地方を統括する上で重要な役割を果たしました。東山道のルートに美濃国各務郡の通過（※）が想定されており、実際にルート周辺からは古代集落が確認されています。（広畑野口遺跡、鵜沼古市場遺跡など）国家が新たに道路を整備することにより、集落の解体・統合といった「地域の再編成」があったのではないかと考えます。岩地遺跡で確認できた集落はまさにその一事例ではないかと考察します。